

国語

国語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

翻訳の概念を限定するのはヨウイ^アなことではない。私は、自分の感情を行動に翻訳できるし、法律の言葉を解^{わか}りやすく日常の言葉に翻訳することもある。また、私は、古典を読み、自分なりに現代語に翻訳したり、同じ現代の文学作品も、自分の言葉に翻訳してみることもできる。翻訳をゲンミツ^イに考えるかぎり、そもそも文章を読むということ自体が翻訳であろうし、翻訳でない解釈を考えることはできない。そこで翻訳を極く狭く限定して、英語からドイツ語へとか中国語からアラビア語へといった二言語間翻訳のみに限ろう。しかも言語はここでは閉じられた全体性と考えられてしまっていることを問題にしないでおう。その場合、翻訳はすでに知られている言語と知られていない言語の間で行われる。全ての人が両方の言語を知っているという条件が成立するときには、翻訳は必要なくなるからである。一般に、翻訳が成立するのは、両方の言語を知っている人間と片方の言語しか知らない人間のソウホウ^ウが存在する場合のみである。すなわち、翻訳される言語が知られており同時に知られていないというのでなければ翻訳は問題とならない。翻訳はある言語についての知のⅠ^イがあるところでのみ成立する。翻訳はある言語を知らない人がいるからこそ成立する。

余りにも自明でほとんど同語反復に見えるこのチンジュツ^エをテツテイ^オ的に考えてみる必要がある。

翻訳される言語を知らない人がいるから翻訳されるのである。翻訳される言語を知らない人間にとって遂行された翻訳が正確なものかそうでないかは知りようがない。なぜなら、その人は翻訳される言語を知らないからである。さらに忠実に翻訳しているという前提があるかぎり、翻訳を遂行する人が、自らが行っている翻訳が正しいものかそうでないかを評価する方法はない。わざと間違ってみせるのではないかぎり、翻訳者自身は自分の翻訳が正しいものかそうでないかは知りようがない。なぜなら、翻訳を遂行している人が翻訳の基準を作り出しており、その翻訳の作業を通じて始めて交換の回路そのものが作り出されているからである。^(注) ヴイトゲンシュタインにナラ^カっていえば、正しい翻訳のための規則を、翻訳の実践を通じてその都度^ア作り出しているのだ。誤訳をしているかも知れないが、まさに自分が誤訳をしているという自覚を持たないから誤訳してしまうのである。つまり、翻訳のセイヒ^キを判断するア・プリオリなⅡ^イは存在しえない。あらかじめ翻訳があつてそれに照らして別の翻訳を判断しうるだけである。したがって、正確な意味がひとつの言語から別の言語へと伝わるといった考え方は、翻訳の作業の後に起こる問題であつて、翻訳がすでに行われたのでなければ、正確な翻訳という等価関係の認定自体意味を持たない。翻訳の発話が意味の正確さの判断の前に起こるのである。翻訳の基準としての二言語間の

意味の対応とか詩的^クジョウチョの翻訳不可能性といった判断が、すでに遂行された翻訳に対する事後的な説明であるにもかかわらず、あたかも、翻訳を指導する^b枠組みとして表象されるのは、^A翻訳と交換される意味の等価関係についての論理的な関係が倒錯しているからである。

ここで翻訳を再現^レ、表象^レする、機制を考えると、二言語間翻訳という考え方そのものが想像的なものであることが解ってくる。翻訳する言語と翻訳される言語の間の交換として、人は、二言語間での意味の移行として翻訳を表象するが、こうした表象を経験上もてるのは、翻訳される言語と翻訳する国語の両方を知っている者だけである点に注意しておく必要がある。翻訳を真に必要とする人にとって、翻訳される言語は知りようがない。二つの言語を英語とか日本語といった言語の単位で代表させることができるというはなはだ^ケアヤしい前提でしばらく話を進めることができるとして、例えば^注スワヒリ語の文献を日本語に訳した場合を考えてみよう。日本の読者の大部分はスワヒリ語の文献を読めないだろう。読者の多くはスワヒリ語の存在さえ知らないかもしれない。しかし、読者の大部分は、スワヒリ語で読めないから翻訳に依存しようとするのである。^Bここで非常に奇妙な事態が成立していることが解る。翻訳を必要とする読者は、翻訳される言語を除いて、翻訳される言語を認知することはできないはずである。だから、読者に^注ハタリ語で書かれた文献を翻訳して、これはスワヒリ語からの翻訳だと言って提示しても、読者は、たまたまハタリ語を知っているのではないかぎり、その誤りを指摘することはできないはずである。つまり、翻訳を必要とする読者は、翻訳される言語を知らないから、翻訳される言語を認知することもできない。翻訳を必要とする読者は未知の言語を知らないだけでなく、未知の言語の存在そのものも実は知らないのである。にもかかわらず、翻訳に頼る読者は、スワヒリ語からの翻訳といって疑わない。それは、私達^{たち}が、世界中には、自分の知っている言語はほんの少しであるにもかかわらず、ロシア語、フランス語、トルコ語といった自分の知らない言語が数多く存在しているのを疑わないのと似ている。

芸人が中国語やフランス語の発音を真似^{まね}つつ、実は全く無意味なことを言っているのを観客は喜んで聞いているショウを知っているだろう。観客の多くは中国語もフランス語も恐らく知らないで笑っているのだろうが、そうした外国語を知らない私達は、冗談としての中国語やフランス語と本物の中国語やフランス語との差を知ることができないのであって、その意味では、冗談の種にされているのは私達自身なのかもしれないのである。ということは、例えば、私の知らない翻訳される言語であるスワヒリ語の存在について、私は伝聞以外の保証を持たないということである。逆に言えば、翻訳される言語は、まず第一義的には、ひとつの仮想として与えられる。なぜなら、私の知らない言語の存在について私は自ら検証する手段を持たず、全ての手掛かりは私には理解不能なまさにその言語で記されているからである。私がある言語を知らないとは、その言語を認知する術^dさえ知らないということであって、基本的には、言語^cについての無知はその言

語についての無知についての無知でもあるのだ。

ということは、私にとって、スワヒリ語の存在はまず Ⅲ を通じて想像的なものとして与えられるのである。未知の外国語を学ぼうとする私にとっても、学ぼうとする外国語は、翻訳される言語と同じように、伝聞を通じてのみ与えられる。それは想像的なものとして与えられる。この想像的な存在は、しかし、カフカの「城」が測量師Kにとってそうであったように絶対的かつ「グウゼンのな命令としての意味をもつ」^(注)。しかも、翻訳の場合と同じ様に、外国語の学習では、外国語の存在は、私の学習への欲望を規制し指導するのである。未知の外国語の存在は、私の長期にわたる学習を導く理念の役割をはたす。つまり、単にイメージとしてあるという意味で想像的であるよりも制作的な意味で想像的なのである。

ということは、外国語はまず想像的な点でひとつの形象であると同時に、カントが統制的な理念と呼んだものであることが解る。すなわち、翻訳される言語あるいは外国語は「対象そのもの」としてではなく「理念の対象」としてのみ与えられるから、「実際には図式があるきりで、しかもこの図式には、直接にはいかなる対象も——仮言的にすら——認められないのである」。だから、経験つまり経験的知識の成立にかかわる理念ではなく、それは「可能的経験の対象に関する我々の認識をこれによって実際に拡張するのではなく、ただ可能的経験の経験的統一を体系的統一によって拡大するにすぎない」のである。それは、「体系的統一に関する図式を我々に与える理念」なのである。

(酒井直樹『日本思想という問題』による)

(注) ヴイトゲンシュタイン——オーストリア生まれの哲学者(一八八九―一九五一年)。

スワヒリ語——アフリカ東海岸で話される広域共通語。

ハタリ語——未詳。

カフカ——チェコの作家(一八八三―一九二四年)。『城』は代表作のひとつ。

カント——ドイツの哲学者(一七二四―一八〇四年)。

問1 二重傍線部ア～コのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	ヨウイ	1
イ	ゲンミツ	2
ウ	ソウホウ	3
エ	チンジュツ	4
オ	テツテイ	5
カ	ナラツテ	6
キ	セイヒ	7
ク	ジヨウチヨ	8
ケ	アヤしい	9
コ	グウゼン	10

問2 傍線部a～dの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	都度	11
b	梓組み	12
c	生半可	13
d	術	14

問3 空欄Ⅰ～Ⅲに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。

- ① 伝聞 ② 経験 ③ 前提 ④ 格差 ⑤ 基準

Ⅰ 15 Ⅱ 16 Ⅲ 17

問4 傍線部A「翻訳と交換される意味の等価関係についての論理的な関係が倒錯している」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

18

- ① 翻訳者は常に自分が誤訳をしているという自覚を持たなければならないのに、その自覚を持たず事後的に誤訳を自覚するのは、自覚の論理が時間的に真逆であるということ。
- ② 翻訳が正確かどうかは翻訳を読む者はもちろん、翻訳者自身にもわからないことなのに、それを判断するのは傲慢であるばかりでなく、論理的にも間違っているということ。
- ③ 翻訳の正しさについての判断は翻訳されたものについて言えることなのに、まだ翻訳されていない段階でその正しさについて判断するのは論理的に順序が逆であるということ。
- ④ 翻訳が正しいかどうかの判断は翻訳者にしかわからないことなのに、翻訳を読む者がそれを判断するのは、言語と翻訳との論理的な関係から見ても矛盾しているということ。
- ⑤ あらかじめ翻訳の基準を設けておかないと正確な翻訳などできないのに、その論理もわきまえず、翻訳した後でその正確さを主張しても独りよがりになってしまうということ。

問5 傍線部B「非常に奇妙な事態」とあるが、それはどのような事態をいうか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

19

- ① 翻訳を必要とする者は翻訳される言語の知識を持たないだけでなく、その言語を認知することさえできないにもかかわらず、なぜかその言語からの翻訳であると信じて疑わないという事態。
- ② 翻訳を必要とする者は、翻訳する言語と翻訳される言語の間の交換が正しく行われているかどうかを知らないにもかかわらず、なぜか正しく行われていると認知しているという事態。
- ③ 翻訳を必要とする者は翻訳される言語をまったく認知できないにもかかわらず、翻訳を読むと、なぜかその言語を翻訳を読む以前から認知していたような気分になってしまうという事態。
- ④ 翻訳を必要とする者は翻訳される言語の存在そのものさえ知らないにもかかわらず、なぜかその言語についてほんのわずかであれ、知識を持っていることが例外としてありうるという事態。
- ⑤ 翻訳を必要とする者は翻訳される言語の存在そのものさえ知らないにもかかわらず、なぜか翻訳する言語と翻訳される言語の間の交換が正しく行われると確信しているという事態。

問6

傍線部C「言語についての無知はその言語についての無知についての無知でもある」とあるが、それはどういうことか。スワヒリ語を例にした説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。 20

- ① スワヒリ語を知らない者は、スワヒリ語を聞いてもちんぷんかんぷんなので、スワヒリ語についての無知を人前でさらけ出してしまうということ。
- ② スワヒリ語を知らない者は、スワヒリ語と他の言語を区別することができないので、他の言語をスワヒリ語と勘違いして聞くことがありうること。
- ③ スワヒリ語を知らない者は、そのこと自体は自覚していても、その無知を知に転換しようという意欲を持たないために、無知のまま留まるということ。
- ④ スワヒリ語を知らない者は、スワヒリ語を聞いてもそれがスワヒリ語であることを知らないで、スワヒリ語についての無知を自覚できないということ。
- ⑤ スワヒリ語を知らない者は、スワヒリ語を認知する術さえ知らないために、スワヒリ語の学習をどのように始めたらよいのかわからないということ。

問7

傍線部D「外国語はまず想像的な点でひとつの形象であると同時に、カントが統制的な理念と呼んだものである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 21

- ① 外国語を学習する者やその翻訳を読む者は、その外国語について知れば知るほど、その統一的な理念を持つようになるということ。
- ② 外国語を学習する者やその翻訳を読む者は、その外国語を部分的に知りうるのみで、その全体像を把握するのは不可能だということ。
- ③ 外国語を学習する者やその翻訳を読む者は、その外国語についての統一的な理念よりも個々の具体的な知識を欲するものだということ。
- ④ 外国語を学習する者やその翻訳を読む者にとって、その外国語は征服の困難な未知の言語として目の前に立ちはだかるものだということ。
- ⑤ 外国語を学習する者やその翻訳を読む者にとって、その外国語はあるまとまりを持った理念としてしかイメージできないということ。

問 8

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

22

- ① 翻訳者は翻訳される言語について正しい知識を持って正確に翻訳できるが、外国語の学習者はその外国語について知識を持たず、想像するばかりである。
- ② 翻訳を読む者は翻訳される言語の存在に関して伝聞以外の保証を持たず、自ら検証することができないが、これは外国語を学ぶ者にとっても同じである。
- ③ 外国語が仮想として与えられる点では翻訳を読む者も、外国語の学習者も同じであるが、後者は前者と違い、その外国語について多少の知識は持っている。
- ④ 翻訳者は翻訳の基準としての二言語間の意味の対応関係を事前に理解し、判断しているが、外国語の学習者はその対応関係を事後的にしか理解できない。
- ⑤ 外国語の学習者は自分の翻訳が正しいかどうかは判断できないが、翻訳者は自分の翻訳の妥当性を理解でき、誤訳をしていれば必ず自覚するものである。

第2問

次の文章は、『源氏物語』の一節で、源氏と紫の上が話し合っている場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

雪のいたう降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌かたちも光りまさりて見ゆ。

(源氏)「時々につけても、人の心をうつすめる花紅葉もみぢの盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしてみて、この世の外のほかことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじき例なほしに言ひおきけむ人の心浅さよ」とて、御簾ま捲き上げさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前い裁のかげ心苦しう、遣水やりみづもいいたうむせびて、池の水もえもいはずすぎに、童わらわべおろして雪まろばしせさせたまふ。をかしげなる姿、頭かみつきども月に映えて、大きやかに馴なれたるが、さまざまの相乱あひれ着、帶しどけなき宿直姿なまめいたるに、こよなうあまれる髪かみの末、白きにはましてもてはやしたる、いとけざやかなり。小さきは、童わらわげてよろこび走るに扇なども落として、うちとけ顔をかしげなり。いと多う転まろばさむとふくつけがれど、えも押し動かさでわぶ(i)めり。かたへは東のつまなどに出でゐて、心もとなげに笑ふ。

(源氏)「ひと年(注)、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。何のをりにつけても、口惜しう飽うかずもあるかな。いとけ遠くもてなしたまひて、くはしき御ありさまを見ならしたてまつりしことはなかりしかど、御まじらひのほどに、うしろやすきものには思(iii)したりきかし。うち頼みきこえて、とあることかかるをりにつけて、何ごとも聞こえ通ひしに、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、言ふかひあり、思ふさまに、はかなき事わざをもしなしたまひしはや。世にまたさ(注)ばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深(注)うよしづきたるところの並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど紫のゆゑこよなからずものしたまふめれど、すこしわづらはしき氣添けひて、かどかどしさのすすみたまへるや苦しからむ。前斎院の御心(注)ばへは、またさまことにぞみゆる。さうざうしきに、何とはなくとも聞こえあはせ、我も心づかひせらるべきあたり、ただこの一(注)ところや、世に残りたまへらむ」とのたまふ。

(紫の上)「尚侍(注)こそは、らうらうじくゆゑゆゑしき方は人にまさりたまへれ。あさはかなる筋(注)など、もて離れたまへりける人の御心を。あやしくもありけることどもかな」とのたまへば、(源氏)「さかし。なまめかしう容貌よき女の例には、なほひき出でつべき人ぞかし。さも思ふに、いとほしく悔しきことの多かるかな。まいて、うちあだけすきたる人の、年積もりゆくままに、いかに悔しきこと多からむ。人よりはこよなき静けさと思ひし」**b**「などのたまひ出でて、尚侍の君の御事にも涙すこしは落としたまひつ。

(注) 中宮——藤壺。源氏の父である桐壺帝の中宮。源氏の理想の女性。この場面ではすでに亡くなっている。

言ふかひあり——相談のしがいがあつて。

はかなき事わざ——ちよつとしたこと。

さいへど——何といつても。

紫のゆゑ——紫の上は藤壺の姪であり、藤の花が紫色であることを指している。

前斎院——朝顔の姫君。源氏は求愛したが、拒まれた。そうした状況に、紫の上は苦しんでいた。

尚侍——朧月夜。弘徽殿女御(桐壺帝の女御)の妹で、源氏の恋人の一人。

問1 傍線部ア～ウの古語の読みを、現代仮名遣いのひらがなで記せ。

ア 御簾 23

イ 前栽 24

ウ 宿直 25

問2 波線部あ～おの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうち

からそれぞれ一つずつ選べ。

あ すさまじき ① むなしい

26 ② 恐ろしい

③ 劣っている

④ 興ざめである

⑤ 不吉である

い えもいはず ① 言いようのないほど

27 ② 言つてもしかたがないほど

③ 言いかけてやめるほど

④ 言うに足りないほど

⑤ 言いたくないほど

う 飽かず ① 腹立たしく

28 ② 不都合で

③ 心残りに

④ 堪えがたく

⑤ 気がかりに

え よしづきたる

29

- ① 誠実である
- ② 老成している
- ③ 風雅が備わっている
- ④ 親しみが持てる
- ⑤ 道理にかなっている

お さうざうしき

30

- ① つらい
- ② 寂しい
- ③ 悲しい
- ④ 気がかりな
- ⑤ にぎやかな

問3 二重傍線部 a 「らる」の文法的意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ
選べ。 31

- ① 婉曲
- ② 可能
- ③ 尊敬
- ④ 受身
- ⑤ 自発

問4 空欄 b に入る助詞として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 32

- ① ばや
- ② のみ
- ③ ばかり
- ④ だに
- ⑤ まで

問5 二重傍線部(i)～(iv)の動作の主体として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。同じものを二度用いてもよい。

- | | | | |
|-------|------|-------|------|
| (i) | わぶ | 33 | |
| (ii) | 見ならし | 34 | |
| (iii) | 思し | 35 | |
| (iv) | しなし | 36 | |
| ① | 源氏 | ② 童べ | ③ 中宮 |
| ④ | 前斎院 | ⑤ 紫の上 | ⑥ 尚侍 |

問6 傍線部A「心もとなげに笑ふ」とあるが、どんなことを見て笑っているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 37

- ① 小童が大きくなりすぎている雪玉を転がせないで困っているのに、大童が手助けしよう
としないこと。
- ② 小童が雪玉を転がして大きくしようとしているが、押して動かすことができないで手こ
ずっていること。
- ③ 小童が雪玉を転がして大きくなっているのに、もっと転がして大きくしようと欲ばって
いること。
- ④ 小童が雪玉を転がして大きくすることに熱中するあまり、扇を落としたことに気づいて
いないこと。
- ⑤ 小童が大きな雪玉を転がすことができずに困っているのを、源氏が見て悲しそうにして
いること。

問7 傍線部B「なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな」の解釈として最も適
当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 38

- ① やはり目新しく感じられるように、ちよつとした趣向を上手になさったことよ
- ② やはり好ましく感じられるように、格別に作り変え申し上げたことであるよ
- ③ いっそう珍しく見えるように、様々に手を加えてお作りなさったことであるよ
- ④ いっそう目新しく見えているが、さりげなく作ったように装っておられましたよ
- ⑤ いっそう珍しく見えるのは、少しばかりの工夫をして作り申し上げたからだよ

問8 傍線部C「世にまたさばかりのたぐひありなむや」とあるが、源氏がどのように述べたのはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 39

- ① 藤壺の方とは、あまりお近づきになる機会はなかったが、まれに親しく接することがあった時に相談すると、自分が頼んだことは何でも快く引き受けてくれたから。
- ② 藤壺の方は、いつも控えめで表立ったことはしなかったが、自分が困った時に相談すると、他のことは放っておいても、いろいろと手を尽くして助けてくれたから。
- ③ 藤壺の方とは、最初の頃はあまり親しくしていなかったが、しだいに親しく付き合うようになり、願い事は何でもお引き受けして仲がますます深くなっていったから。
- ④ 藤壺の方は、中宮という高い位についた後も、常につつましく目立つことは控えていたが、自分とだけは親しく付き合っ何でも相談してくれたから。
- ⑤ 藤壺の方が、宮中にいた頃は自分を信頼してくれており、自分もまた何かある時には相談して、ちょっとしたことでも希望通りに対応してくれたから。

問9 傍線部D「紫のゆゑ」とあるが、源氏がこのことにわざわざ言及した意図の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 40

- ① 紫の上は、今は口うるさいという欠点があるが、藤壺とゆかりがあるから、将来は必ず恥ずかしくない地位につくことができるとうまく励まそうとしている。
- ② 紫の上は、比類なく立派な藤壺とゆかりがあるから、それ相応なところがあると一応認めたとえで、勝気なところがあると穏やかに注意しようとしている。
- ③ 紫の上は、立派な藤壺とゆかりがあるのだから、他人から非難されるよりも前に藤壺を見習って、人とうちとけないという欠点を直すように忠告しようとしている。
- ④ 紫の上は、全く欠点のない藤壺とゆかりがあるから、中宮の地位につくためには、今のうちに気ままな性格を直すようにきびしく戒めようとしている。
- ⑤ 紫の上は、立派な藤壺とゆかりがあるのに、人柄に欠点が多いので、自分が朝顔の君に心ひかれるのも仕方がないと言いつつ諷しようとしている。

問10

傍線部E「あさはかなる筋など、もて離れたまへりける人の御心を。」とあるが、ここから、紫の上が朧月夜をどのような人物として捉えていることがわかるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

41

- ① 浮ついたところなど少しもない人物。
- ② 身分の低い人物とは全く交際しない人物。
- ③ 尚侍まで順調に位が上がった人物。
- ④ 未熟なところを悔い改めた人物。
- ⑤ 低い身分から一気に出世した人物。

問11

源氏は雪景色について、どのような思いを抱いているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

42

- ① 世間の人が華やかな色とりどりの花や紅葉をほめたたえるのは、雪が降り積もってしおれた植え込みの草木を愛おしむ情が足りないからだという思い。
- ② 雪の降り積もった冬景色の中では、前栽も遣水も池の氷も普段とは全く違った趣深い感じがして、花や紅葉よりもしみじみとした情趣が感じられるという思い。
- ③ 雪の降り積もった夜の庭は、花や紅葉が盛りの時のような華やかさはなく白一色の景色であり、この世のものとは思われない無の世界にるように感じられるという思い。
- ④ 世間の人が単調な冬の雪景色よりも花や紅葉に魅力を感じているのは、単に表面的な華やかさや鮮やかさにあこがれている浅はかな気持ちからであるという思い。
- ⑤ 月の光に照り映えている雪景色は華やかな色はないけれども、世間の人が心ひかれていく花や紅葉の盛りの景色よりも、身にしみて美しく感じられるという思い。

① 源氏は雪の降る日に女童に雪玉を作らせて、それを見ながら自分がかつて藤壺のために雪玉を作ったことを思い出し、藤壺への愛おしさが、独りごとのように思わず口をついて出てしまっている。

② 源氏は藤壺のことを話すうちに、紫の上が自分と藤壺の仲を疑っているかもしれないと気付いたので急いで話題を変え、紫の上が藤壺の縁につながっていることを話して、紫の上をほめたたえている。

③ 源氏は眼前の雪景色に魅せられて童たちに雪玉を作らせ、その連想から藤壺を懐かしく思い出し、さらに藤壺の縁につながる紫の上のことに言及して、その二人と比較する形で朝顔の姫君への述懐が続けている。

④ 紫の上は、源氏が自分に対して強い不満を口に出したので、心穏やかならず腹が立って、源氏が浮き名を流した朧月夜のことを取り上げて、源氏の身勝手さを非難し、仕返しをしている。

⑤ 紫の上が朧月夜について述べたことを、源氏は的を射た批評であると納得して、自分が朧月夜と長年にわたって浮名を流したことを深く反省し、紫の上に申し訳なかったと涙を流して謝っている。